ヤンゴン素描　7

ビルマ三大王の像

ヤンゴンの下町から北へ向かうピー街道沿いに沿って、国立博物館がある。5 ドルの入場料は高い気がするが、前庭に立つ 3 人の大王のブロンズ像はただで見られる。それぞれ個性的な像だが、その容貌について当時の記録が残っているわけではなく、彫刻家ウ・ハン・タン（U Han Tan　（1926-2000）の洞察力の賜物である。

アノーヤター王（在位 1044－77 年）

　アノーヤター（アノーラター）王は、バガン王朝（第一ビルマ帝国）の創始者。密教色が強く腐敗していた大乗仏教を遠ざけ、上座部仏教による統治の仕組みを作り、バガン寺院群の建設に着手した。

　王冠の鱗の重なりは、伝説のメルー山（須弥山（しゅみせん））を主峰とするヒマラヤの意匠だろう。宇宙の調和と一体化する賢王のイメージ。トーガのような布を左の肩でとめ、視線を高く保つ賢者の面立ち。挿絵には出ていないが、左手には経典一式を持って、仏教擁護者であることを示している。

　ビルマ族にとっては英雄だが、経典を強奪され、僧侶を強制連行されたモン族にとっては、先進文明を蹂躙した、憎っくき敵である。